


「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 29 年 9 月 18 日	
所属部局・職	霊長類研究所・博士課程学生 (D1)
氏名	武 真祈子

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
富山大学
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
日本哺乳類学会
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 29 年 9 月 8 日 ~ 平成 29 年 9 月 11 日 (4 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
特になし
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
2017 年 9 月 8 日 (金) ~ 9 月 11 日 (月) の 4 日間、富山大学にて行われた日本哺乳類学会に参加した。発表はせず、見学のみの参加だった。 今回の出張目的は、日本でどのような哺乳類研究が行われているか知り、その界隈に知り合いを増やすことであった。
行く前に聞いていたとおり、野生哺乳類の「保全」や「管理」を目的とした研究が多いと感じた。東北の農村出身の私にとっては、猿害や、ニホンジカとイノシシの北上などは身近な問題である。にもかかわらず、現在はアマゾンに生息するサキの生態などという、日本の現場とかけ離れた研究をしているため、居住まい悪く感じる部分がないわけではなかった。懇親会などで同年代の学生と話していても、なかなかサキの研究の意義やおもしろさを上手に伝えることができなかつたように感じた。彼らにとっては見たことも聞いたこともないような対象動物なので仕方がない部分もあるかもしれないが、それ以上に自分の研究に関する知識がまだまだ不足しており、適切に語るることができないことが問題だと感じた。今回は同年代の学生と密に交流する機会が多く、こういった刺激を受けられたことは大きな収穫であった。
一緒に参加した先輩研究者は、マンドリルというアフリカに生息する霊長類について発表し、見事ポスター賞を受賞されていた。対象生物が必ずしも日本でポピュラーなものでもなくとも、研究の質や面白さによって日本の学会 (霊長類学会以外) でも勝負できるのだ、ということの何よりの証明であり、励みになった。

秋の富山湾
6. その他 (特記事項など)
今回の出張を支援してくださった PWS リーディング大学院プログラムの皆様、および本学会への参加を勧めてください。学会期間中もサポートしてくださった霊長類研究所・本郷峻氏に感謝いたします。ありがとうございました。